

光源氏の愛した地・塩釜

京都に移された塩釜

◆塩釜という名のテーマパーク◆

塩釜を詠んだ和歌は今も三百首以上残されていますが、当時の都人は単に塩釜の風景を想像したのではなく、源融によって「京都に移された塩釜 六条河原院」を眺め、遊んで、みちのくの塩釜を訪れたつもりになって詠んだのです。

まさに「塩釜」という名のテーマパークだったわけです。

◆日本庭園のルーツ塩釜◆

源融が「塩釜」という庭園を築くまでは中国式の庭園が主流であつただろうと想像されますが、「塩釜」という日本の風景をモデルにしたことから、日本庭園のルーツとも考えられています。

◆京都市下京区本塩竈町◆

「京都に移された塩釜」の痕跡は、今も京都市下京区の五条大橋の近くに本塩竈町と塩竈町の名として残されています。

また、近くにある東本願寺の別邸「涉成園（しやうせいえん）」は、この大庭園跡地の一部ともいわれています。江戸時代に戻元されたもので、往事の規模には及びませんが、それでも二百m四方あります。



涉成園



今も「塩釜の手水鉢」「塩釜の井」などが残り、その閑静な庭園は国の名勝にも指定され、京都のビル街の一角に、時を越えた美しい空間が広がっています。

塩釜の金が源融の財力!?

◆塩と金のまち塩釜◆

西暦八六四年頃の塩釜は「国府津千軒（こうづせんけん）」と呼ばれる国府多賀城の港になっていた。海路で都と結ばれた軍事・文化・物流の拠点でした。塩釜は、古くから塩造りで栄えた町であり、食用はもちろん、軍事用にも大量製塩されていました。また、源義経を奥州平泉に導いた金売吉次が、多賀国府のあたりに住んでいたと平家物語に描かれています。もしかすると奈良から平安時代にかけてあった「鳥居原古代市場（現在の塩釜高校校庭）」では、塩ばかりでなく、金の取引も行われていたのかもしれません。

源融の母・大原全子の祖先は、百済王（敏達天皇孫）より出たと『新撰姓氏録』にはあります。日本初のコ（宮城県内産）を献上した百済王敬福の一族と、あるいは関係していたのかもしれませんが。宮城の産金から莫大な財力を得て、大庭園「六条河原院」は、造営・維持されたといえれば納得できるのではないでしょうか。



鳥居原古代市場跡碑